The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	臨床哲学的空間 [Vol.1]
Author(s)	
Citation	臨床哲学のメチエ. 1998, 1, p. 28-28
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/5750
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

臨床哲学的空間

医療グループ始動！

今年度から大学院が「臨床哲学」研究室という名前になり、臨床哲学の活動も毎週の授業（臨床哲学演習、金曜６：00～）を中心に密度の濃いものになってきた。授業には、哲学・倫理学を専攻する学生・院生、また社会人選抜で入学してきた看護婦や教師の経験を持つ院生の他に、学外から来た様々な職業の人が参加している。そこでは「哲学」と「現場」を交差させるというコンセプトのもとで、「ケア」の概念（前期）や「看護・介護」（後期）について、試行錯誤ながらも活発な議論が展開されつつある。

同時に研究室では、院生を中心に「教育」と「医療」とをそれぞれの個別テーマとした活動グループが形成された。私たち医療グループでは、これまで、医療・看護に関する事例の検討の他、『医療の現場に臨む哲学』の著者である清水哲郎氏の主催する東札幌病院倫理セミナーを見学したり、箕面の老人保健施設ニューライフガラシアにボランティア実習に行ったりした。今後もこうした「実習」を取り入れるかたちで、医療グループの活動が続けられることになるだろう。

グループが活動を始めた時から議論になったのは、医療や看護・介護の「現場」を実際にこの目で見、この身で体験してみなければ何も語れない、ただ現場の人の話を聞いているだけでは十分ではない、ということだった。しかし他方、私たちは現場の人には決してなれない。現場の人でない者が、現場に関わることで何ができるのだろう。そういう者が現場から何か生産的な事柄を引き出すにはどうすればよいのだろう。活動をしながら、私たちは常にこの問題に直面し、頭を悩ませている。　（堀江剛　ほりえつよし　博士後期課程）

「ニューライフガラシア」訪問

ボランティアをしたらという声が、現場で働いている人たちから上がっていた。そこで「とりあえず」やってみよう、という気持ちで、西川さんの勤めている老人保健施設（医療行為より日常生活のためのリハビリを重点的に行う）「ニューライフガラシア」へ教員・学生が足を運ぶこととなった。

その日は、一日中、施設の中で右往左往している状態ではあった。社会人学生を抜かしたほとんどは介助についてはビギナーであり、目線を合わせるために姿勢を低くすること、利用者の方の言葉が聞き取ること、食事やトイレの介助のために体を近づけることなど慣れないことも多かった。お世話になった施設の方々には改めて感謝の意を伝えたい。

詳細は何らかの形で発表する予定である。今ここで言えることは、一日だけではわからないことが多い、が、そこでしか感じられない空気があったことも事実であり、そのあり様をどう記述できるかが今後の課題であろう。（森芳周もりよしちか＋栗田隆子　博士前期課程）

思考錯誤　**当研究室発行の『臨床哲学ニューズレター』は、本年より『臨床哲学のメチエ』というより身軽でオープンな情報メディアとして生まれ変わりました。「メチエ」とはフランス語で「仕事、作業、職務、腕前」の意味し、臨床哲学が単なる抽象的な思考だけではなく、様々な人々の協同作業によって営まれていることを表現しています。次回は、第２回研究会（山田潤氏の講演）の報告のほか、医療研究グループの具体的な活動や、セクシュアリティ研究会などのそれぞれの現場でのたくましい（？）試みを紹介していきたいと思います。　（編集：栗田隆子・高橋綾・寺田俊郎・本間直樹・Apple Power Macintosh G3）**

大阪大学文学部　臨床哲学・倫理学研究室
560-0043　大阪府豊中市待兼山1-5
homma@let.osaka-u.ac.jp